蜘蛛流棟梁横田杢左衛門による住宅遺構

ON THE REMAINED HOUSES MADE BY YOKOTA MOKUZAEMON,
MASTERBUILDERS OF KUMO SCHOOL

白井裕泰*

Hiroyasu SHIRAI

This paper offers the analysis of and consideration the houses in the architectural documents made by the master-builders, namely the Yokota family in the late Edo era. There are many obscure drawings in this documents, and so we will try to clear the name of them. As a result of our research, we can point out the following findings: drawing I is the plan of Watanabe House, drawing II is Tanaka House, drawing III is Yomogita House A, drawing IV is Yomogita House B.

Keywords: Yokota family's documents, Local masterbuilders, Drawings, Houses in Edo era, Remained houses,

Analysis of plan

横田家大工文書, 地方大工棟梁, 指図, 近世住宅, 住宅遺構, 平面分析

1. はじめに

横田杢左衛門は、旧三春藩を中心にこの地方において、寛保2年(1742)から大正15年(1927)までの6代186年間という長期に渡って活躍した「蜘蛛流番匠」^{※1)}の棟梁である。横田家には全体で859点を数える膨大な大工文書が残されている^{※2)}が、この大工文書は、近世後期から近代初期にかけてのこの地方における地方大工の建築活動の実態を明らかにする上できわめて貴重な資料である。

この文書に関連するこれまでの研究として、横田棟梁が手掛けた社寺建築の調査研究^{※3)}と代表的な社寺建築の生産の実態および絵様についての研究^{※4)}があったが、「横田家大工文書における近世住宅の調査研究」^{※5)}を契機に住宅の調査研究に着手した。

本稿では横田棟梁が手掛けた住宅に注目して、その調査研究の成果を踏まえて、名称が不明であった指図の名称を特定することを目的としている。この点を目的としたのは、横田家大工文書における近世住宅の研究を進めるにあたって、名称が不明である指図を特定しなければ、今後この研究を展開する上で、重大な影響を及ぼすと考えているからである。

2. 住宅に関する横田家大工文書

横田家大工文書のうち住宅に関する文書を分類すれば、絵図27点、

木割帳関係文書11点、契約書関係文書6点、出納帳関係文書5点、出面帳関係文書3点、見積書関係文書2点、仕様書・禁制関係文書がそれぞれ1点となっていて、圧倒的に絵図・木割帳関係文書が多いことがわかる。

たとえば村上家住宅にみる文書を分類すれば、次のようなものがある。(ここにあげた番号は横田家文書の目録番号である)

設計関係文書: 図面/294(平面図スケッチ), 295(平面図)

見積関係文書: 木割帳/290上大越村上氏建前木割帳・造作之木割

見積書/288建前積り・造作小積り, 289余業細工

契約関係文書: 契約書/286大越村上氏御殿造営番匠請合一札之事

施工関係文書: 出面帳/287・292・293覚(工数書上げ), 291書簡

(工数引合い)

出納帳/285金銭之通

これらの文書からわかることは、横田棟梁が住宅を設計・契約・施工する上で、次の順番で文書が作成されたと考えられる。まず設計段階では図面(主に平面図であるが、萩野家住宅の図面にみられるように小屋伏図(図1参照)・断面図(図2参照)・絵様図(図3参照)を描くこともあった)、木割帳、見積書が作成され、契約段階で契約書が、施工段階で出面帳、出納帳が作成されたと考えられる。

* 共栄学園短期大学住居学科 助教授・工博

Assoc. Prof., Dept. of Housing Studies, Kyoei Gakuen Junior College, Dr. Eng.

図1 荻野氏居宅小屋之図（小屋伏図）

図2 荻野亭菴建地（断面図）

図3 荻野氏店持送り（絵様図）

ところで横田棟梁が使っている文書の名称は、平面図を「伏地指（差）図」「地指（差）図」「伏地図」「地割之図」「地図」「伏図」、小屋伏図を「小屋之図」、断面図を「建地之図」、見積を「積り」、契約を「請合」、出面を「覚」、出納を「入用」「通」などと呼んでいることがわかる。

また横田棟梁が使っている住宅の部屋名は、平面図Ⅲ（図4・5、名称不明）によってほぼ知ることができる。この住宅は食違形六間型の平面構成となっていて、西側に「庭」と呼ばれる土間部分があり、その北側に「台所」を設けている。西側床上部分は表に「居間」「玄関」「次間」、裏に「料理間」「小座間」「納戸」「上櫃」が配されている。「玄関」には「敷台」・「小石場」が付き、「上櫃」北側には「畳床」「棚」、さらにその北側に「尿尿所」が設けられている。「料理間」北側には「出格子」が付いている。

以下の記述における部屋名については、原則として平面図Ⅲの呼称を採用することにする。

図4 平面図Ⅲ

図5 平面図Ⅲ（原図から書き起こしたもの）

3. 横田棟梁が手掛けた住宅

横田家大工文書によって、横田棟梁が手掛けた住宅のすべてを整理すると表1のようになる。またその所在地は図6に示したとおりである。

表1 住宅等一覧表（横田家大工文書所収）

No.	名称	建築年代	遺構	現所有者	所在地	旧階層	図面	備考
01	吉田家住宅	文政5(1822)	無	石井新八郎	大越町上大越字町20番	住屋	有	
02	山川家住宅	文政6(1822)	無	空地	須賀川市系尾	住屋	有	
03	村上家住宅	文政6(1822)	無	道徳 豊	大越町上大越字町26番	住屋	有	
04	荻野家住宅	文政9(1826)	無	吉田電気店	小野町小野新町仲町	名主頭	有	別宅
05	大方家酒庫	天保10(1839)	無	大方助紀	小野町飯勢八幡	住屋	無	
06	神保家住宅	弘化3(1846)	無	神保博文	滝根町神保字町207	割頭住屋	有	
07	矢吹家住宅	安政3(1856)	無	矢吹寛一	常葉町新田作折腰195	住屋	有	
08	荻野家住宅	安政5(1858)	無	荻野和美	小野町龍股田千保42	名主頭	有	本宅
09	遠田家住宅	元治2(1865)	無	遠田光代	小野町新本町	住屋	有	(有)
10	白石家醬油倉	元治2(1865)	無	白石徳幸	大越町上大越	住屋	無	
11	永山家住宅	慶応元(1865)	無	永山弘一	滝根町広瀬佐土畑193	住屋	有	
12	田中家住宅	不明	有	田中保夫	いわき市小田井字大坂84	住屋	(有)	
13	根本家住宅	不明	無	旧陶屋	小野町湯沢	住屋	有	(有)
14	長久殿住宅	不明	有	渡辺清徳?	都路村大字古道字本町40	住屋	有	(有)
15	会田屋長屋	不明	無	あいたや呉服屋	小野町横町	住屋	無	
16	叶屋土蔵	不明	有	かのや食堂	小野町横町	住屋	無	

表注：図面有は図面名称が判明しているものであり、図面（有）は不明なものを意味している。

図6 住宅等位置図

横田棟梁が手掛けた住宅は、文政5(1822)年の吉田家住宅(上大越)をはじめとして、慶応元(1865)年の永山家住宅(広瀬)まで、建築年代が不明なものを合わせて10棟に及び、ほぼ三春藩南部および小野郷に集中する。またそれらは永山家住宅1棟の例外を除いてすべてが庄屋階層の住宅であり、荻野家・神俣家は割頭庄屋^{※1)}であった。このことは横田棟梁が三春藩広瀬村(現滝根町)に居住し、初代横田空左衛門が広瀬村庄屋を務めていた家柄であった^{※2)}ことから自然な成り行きであったといえるのかもしれない。

ところで普請文書によって横田棟梁が手掛けた住宅を知ることができるが、具体的に何代目の棟梁が住宅建設に関与したのかを探ってみると、次のような資料がある。①同所(上大越吉田氏居館)造作木割覚(文政5年)棟梁蜘蛛流番匠横田空左衛門 藤原包朋 ②吉田氏御殿伏地指図 蜘蛛流番匠横田空左衛門 藤原包朋 ③浜尾山川氏建前木わり膳 蜘蛛流番匠横田空左衛門 藤原包朋 ④山川氏御殿伏地指図 蜘蛛流番匠横田空左衛門 藤原包朋 ⑤上大越村村上氏御殿伏地指図 蜘蛛流番匠横田空左衛門 藤原包朋 ⑥荻野氏居舎建前木割膳(嘉永5年)大工棟梁横田包蒿 ⑦荻野氏居舎地指図 蜘蛛流番匠横田空左衛門 藤原包朋 ⑧荻野氏居館地指図 諸職之司領工匠大棟梁蜘蛛流横田氏 藤原包朋 ⑨荻野氏居館地指図 蜘蛛流番匠横田氏 藤原包朋 ⑩小野府仲町荻野亭館地指図 番匠大棟梁横田隠遁舎 ⑪(渡辺家住宅(推定)平面図) 棟梁横田母九財門尉包蒿

これらの資料にみられるように、吉田家住宅・山川家住宅・村上家住宅・荻野家住宅を手掛けた「包朋」とは四代目空左衛門のことであり、幼名を広治といった。また「包蒿」とは五代目空左衛門のことであり、幼名を虎吉・善作といった^{※3)}。広治は横田家の建築生産活動における第2期(文政2・1819~明治元・1869)である全盛期を形成し、蜘蛛流棟梁の名をこの地方に広めた棟梁であった。広治が全盛期を形成するにあたって、この地方の有力者である庄屋住宅を手掛けたのは、きわめて重要な意味を持っていた^{※4)}。

4. 住宅遺構の調査

横田棟梁が手掛けた建物の存在を確認するために、すべての住宅について現地調査を行った。その結果、田中家住宅が遺構として残っていることが確認できた。また長久殿は古道新田の庄屋と考えられ、これに該当するのは渡辺家であり、渡辺家住宅も遺構が残されていた。両住宅は横田棟梁が手掛けた住宅の遺構として現在まで残されていて、横田棟梁の業績を考慮すると、極めて資料的価値の高いものといえよう。

田中家住宅と渡辺家住宅については詳細に調査したので、その概要をここに示しておくことにする。

渡辺家住宅 / (当初, 19世紀初): 食違形六間型

渡辺家住宅は都路村に所在し、渡辺家は江戸時代において古道新田の庄屋であった。渡辺家12代目の現当主によると、現在の住宅は7代目勘左衛門(嘉永6年死去)によって建立されたといわれる。したがってこの住宅の建築年代は少なくとも19世紀中期を下らないといえよう。

復原平面をみると、まず主屋の西側に「内馬屋」が付属していることがわかる。主屋の西側に「庭」の土間部分があり、東北隅に下縁が張り出している。東側の床上部分には表に「居間」「玄関」「

図7 渡辺家住宅梁行断面図

図8 渡辺家住宅 現状平面図

図9 渡辺家住宅 当初平面図

図10 渡辺氏宅家相図

図11 渡辺家住宅南面外観

座敷」が、裏に「料理間」「納戸」「上櫃」が配されている。「居間」「料理間」境と「玄関」「納戸」境と「座敷」「上櫃」境が食い違ったいわゆる食違形六間型となっている。「玄関」には「敷台」が付き、「座敷」南側と「座敷」「上櫃」東側と「上櫃」北側に内縁形式の回り縁が取り付け、「上櫃」西側には1間半の大床が設けられている。この住宅では「上櫃」「座敷」といった横配列の続き座敷が成立している。

このように平面形式が食違形六間型であることから、この住宅の建築年代は恐らく19世紀初期であろう⁸⁵⁾。

渡辺家住宅は幕末(19世紀中)ころ多間型⁸⁶⁾に改造されたと考えられる。「渡辺氏宅家相図」(明治後期に作図されたものか)を見ると、当初の住宅の床上部分の北側を拡張し、さらに上段の北側に2室増築して、全体の屋根を曲屋形式とした。また座敷の南側に通路を挟んで2室構成の離れ座敷を増築している。これは隠居として使われたのであろう。また主屋の北側に土蔵を増築し、馬屋の南側に別棟で便所・風呂場を、西側に厩を増築している。主屋の床上部分は西側に表から「うわえん」「げや」の2室、中央に表から「なかのま」「なんど」「なんど」の3室、東側に表から「げんかん」「おもてざしき」「ざしき」「じょうだん」の4室が配されている。「げんかん」には式台が付き、「おもてざしき」「ざしき」「じょうだん」には内縁形式の回り縁が設けられている。上段の北側には床の間・違い棚が設けられ、その北側に廊下を挟んで客用の便所・湯屋が設けられている。

この住宅では「じょうだん」「ざしき」「おもてざしき」「げんかん」といった縦配列の続き座敷が成立しているが、これは藩の役人を接客するための施設である役宅として作られたのであろう。

田中家住宅／(当初、19世紀初)：食違形四間型

田中家住宅はいわき市尾白井に所在し、田中家は江戸時代において尾白井村の庄屋であった。尾白井村は江戸時代は小野郷に属し、明治になっていわき市に編入された⁸⁶⁾。現在の当主保夫氏は田中家の38代目といわれるが、保夫氏によると34代目(現当主から3代前)が惣太郎であったそうで、横田家文書に記載された田仲惣太郎と考えられる。

復原平面をみると、まず主屋の西側にづくりこみの「うまや」、東側に「みそべや」が付属していることがわかる。主屋の西側に土間部分があり、北東隅に「したえん」を設けている。東側の床上部分は表に「うわえん」「ざしき」、裏に「へや」「なんど」が配され、「うわえん」「へや」境と「ざしき」「なんど」境が食い違ったいわゆる食違形四間型となっている。この住宅に座敷飾がみられなかったのは、あるいはこの建物が隠居所として造られたためであったからかもしれない。

次に構造をみると、以下のようである。土間上部に中2階が設けられ、西側より1.5間梁行筋に「ませ桁」が架けられ、その上の桁行方向に半間間隔に「二階梁」が架けられている。床上部分には上屋の梁行方向に原則として1間間隔に「うず梁」および「上梁」(ただし「ざしき」「なんど」上部は0.75間間隔)が二重梁として架けられ、桁行方向には上屋側柱筋に「上桁」、上屋中央筋に「本梁」が架けられ、格子状の梁組となっている。南側庇には上屋柱から繋ぎ梁が軒桁を打ち越して出桁となって茅負・裏甲を受けている。

図12 田中家住宅 現状平面図

図13 田中家住宅 当初平面図

図14 田中家住宅 現状構造図

図15 田中家住宅 現状南立面図

図16 田中家住宅 現状北立面図

図18 田中家住宅現状西立面図 図17 田中家住宅現状東立面図

図19 田中家住宅 現状桁行断面図

図20 田中家住宅現状梁行断面図 図21 田中家住宅ウワエン東面

図22 平面図Ⅰ

図23 平面図Ⅱ

図24 平面図Ⅲ

図25 平面図Ⅳ

5. 名称不明の指図

横田棟梁が残した平面図の中でどの住宅のものであるか不明のものとして平面図Ⅰ（図22）・平面図Ⅱ（図23）・平面図Ⅲ（図24）・平面図Ⅳ（図25）がある。

ところでどの住宅の平面か不明である平面図Ⅰをみると、この住宅は次のような特徴をもっている。まず主屋の西側に馬屋をつくりこんでいる。主屋の西側に「庭」があり、東側の床上部分は表に「居間」「玄関」「次間」、裏に「料理間」「納戸」「上櫃」が配された食違形六間型の平面形式となっている。「庭」「居間」「料理間」「納戸」が日常の生活空間であり、「玄関」「次間」「上櫃」が鍔形座敷を構成し、接客空間となっている。それゆえ「玄関」の南側に式台、北側東寄りに床、「上櫃」の北側に床・棚を設け、「次間」南側および「次間」「上櫃」東側に内縁形式の回り縁が取り付いている。

このようにこの住宅は食違形六間型であり、19世紀初期の有力な庄屋階層の典型的な住宅の特徴をもっているといえよう。したがってこの平面図Ⅰと渡辺家住宅（当初）と比較すると、極めて平面が類似していることが窺われ、平面図Ⅰは渡辺家住宅の平面図と推定することができよう。

つぎに建物名称の不明な平面図Ⅱをみると、次のような特徴をもっている。この住宅は主屋の西側に馬屋をつくりこんでいる。主屋の西側に「庭」があり、東側の床上部分には表に「居間」「次間」、裏に「料理間」「上櫃」が配され、食違形四間型の平面形式となっ

ている。「居間」「次間」南側には外縁が取り付いている。「上櫃」北側には床と押入が設けられている。

このようにこの住宅の平面形式は食違形四間型であり、19世紀初期の住宅の特徴をもっていて、座敷飾の有無の違いはあるものの、田中家住宅の復原平面図と極めて類似した平面構成であるといえよう。したがって平面図Ⅱは田中家住宅平面図と推定することができる。

渡辺家住宅・田中家住宅を特定することができたことによって、残りの不明平面図Ⅲ・Ⅳは消去法によっておそらく蓬田家住宅のも

のと考えられる^{註7)}。その平面の特徴は以下のようである。

蓬田家住宅A（推定、元治2・1865年）：食違形六間型

この住宅は西側に「庭」「台所」があり、東側床上部分には表に「居間」「玄関」「次間」、裏に「料理間」「小座敷」「納戸」「上櫃」が配され、食違形六間型の平面形式となっている。「玄関」の南側に敷台、北側に大床が付き、「上櫃」北側には畳床・違棚が設けられ、「次間」南側および「次間」「上櫃」東側に内縁形式の回り縁が取り付けられている。「庭」「台所」「居間」「料理間」「小座敷」「納戸」の部分は日常的な生活空間であり、これと強く意識的に区別して、「玄関」「次間」「上櫃」の部分は鏡形座敷を構成し、格式の高い接客空間となっている。

図26 蓬田家住宅A 復原平面図（平面図Ⅲより作図）

蓬田家住宅B（推定、19世紀中）：整形六間型

この住宅は東側に土間部分の「庭」があり、その東南隅に10畳の部屋が設けられてる。西側床上部分は表に「勝手」「見世」「座敷」が、裏に「料理間」「納戸」「小座敷」が配され、整形六間型の平面形式となっている。ただし玄関や座敷飾など格式的な表現は見られない。これは蓬田家の本宅ではなく、見世であったためかもしれない。

図27 蓬田家住宅B 復原平面図（平面図Ⅳより作図）

以上のような指図の詳細な検討によって、平面図Ⅰ・平面図Ⅱ・平面図Ⅲ・平面図Ⅳは、それぞれ渡辺家住宅・田中家住宅・蓬田家住宅A・蓬田家住宅Bのものであると考えられる。

6. 結論

これまでの考察を要約すると以下のようになる。

- 1) 住宅普請文書は、設計段階で図面・木割帳・見積書、契約段階で契約書、施工段階で出帳・出納帳が作成された。
- 2) 横田棟梁が手掛けた住宅の中で、遺構として残っているのは渡辺家住宅・田中家住宅の2棟にすぎず、横田棟梁の業績から判断して、

歴史的資料としての価値が極めて高いものであると考えられる。

3) 平面図Ⅰは渡辺家住宅の平面図と推定され、この平面形式が食違形六間型であることから、この住宅の建築年代は恐らく19世紀初期であろう。

4) 平面図Ⅱは、座敷飾の有無の違いはあるものの、田中家住宅平面図と推定され、この平面形式は食違形四間型であり、19世紀初期の住宅の特徴をもっている。

5) 渡辺家住宅・田中家住宅を特定することができたことによって、残りの不明平面図Ⅲ・Ⅳは消去法によっておそらく蓬田家住宅のものと考えられる。平面図Ⅲは食違形六間型（元治2・1865年）、平面図Ⅳは整形六間型（19世紀中）となっている。

最後にこの論文をまとめるにあたって滝根町教育委員会の先崎忠衛氏のご助言をいただいた。記して感謝の意をあらわしたい。

<注>

本研究は財団法人住宅総合研究財団の1998年度研究助成によって実施された調査をもとに行われたものである。また本研究の一部は住宅総合研究財団研究年報（No.26, 1999年版）に発表している。

1) 「蜘蛛流」という流派の名称の由来は不明である。流派の実態については今後の研究課題とする。

2) 横田家大工文書は、福島県田村郡滝根町の町史編さんに伴って行われた昭和59年度の古文書調査において慶應大学主任調査員浜野淑氏（現京都女子大学）によって発見されたものであり、滝根町古文書調査報告4（滝根町資料集第10集、昭和61年3月）および滝根町古文書調査報告6（滝根町資料集第14集、昭和63年3月）にその目録が収録された。

3) 第1期の研究は横田棟梁が手掛けた建築のうち現存するものと大工文書の内容を比較検討するために昭和61年度から平成4年度にかけて7回におよぶ建築調査が行われ、次のような調査報告書がまとめられた。①滝根町建物調査報告1（滝根町資料集第11集）1986年3月②滝根町建物調査報告2（滝根町資料集第13集）1987年3月③滝根町建物調査報告3（滝根町資料集第15集）1988年3月④滝根町建物調査報告4（滝根町資料集第17集）1989年3月⑤滝根町建物調査報告5（滝根町資料集第18集）1990年3月⑥滝根町建物調査報告6（滝根町資料集第20集）1991年3月⑦滝根町建物調査報告7（滝根町資料集第21集）1993年3月

4) 第2期の研究は文書の分析を中心にして平成2年（1991）から継続的に行われ、次のような研究論文がまとめられた。①白井裕泰「横田家大工文書の研究(1)」共栄学園短期大学研究紀要第11号（1995年）②白井裕泰・五ノ井浩二「大工棟梁横田氏の建築生産の実態について—横田家大工文書の研究(2)—」共栄学園短期大学研究紀要第13号（1997年）③白井裕泰・高橋祐二「鹿島神社造営にみる大工棟梁横田氏の建築生産の実態について—横田家大工文書の研究(3)—」共栄学園短期大学研究紀要第14号（1998年）④白井裕泰「蜘蛛流大工棟梁横田氏の虹梁絵様について—横田家大工文書の研究(4)—」共栄学園短期大学研究紀要第15号（1999年）⑤白井裕泰「蜘蛛流大工棟梁横田氏の木鼻絵様について—横田家大工文書の研究(5)—」共栄学園短期大学研究紀要第16号（2000年）

5) 第3期の研究は住宅を中心にして次のような研究論文がまとめられた。①白井裕泰・木田和代・中島陽子「横田家大工文書における近世住宅の調査研究」住宅総合研究財団研究報告（2000年）

6) 注5)文献において、取り扱っている資料数は限られているが、三春領および小野郷の庄屋住宅について考察した結果、食違形六間型住宅があらわれ始めたのは19世紀初であることがわかった。

7) 横田家大工文書にあらわされた住宅についてはすべて現地調査を行い、その存否を確認した。その際、萩野家住宅・蓬田家住宅については別荘が小野郷内にあり、本宅はそれぞれ雇股田と蓬田にあることが判明した。萩野家については図面に記された名称から本宅・別荘の区別ができた。したがって名称不明の平面図Ⅲ・Ⅳは蓬田家の本宅・別荘となり、さらに平面図Ⅳの中に「見世」とあることから、この図は小野郷内に建てられた別荘と判断した。

<参考文献>

- 1) 滝根町史編さん委員会：滝根町史、第1巻通史編、PP.330、滝根町、1990.3
- 2) 「広瀬村人別家御改帳」安永3年（文3）文獻、PP.167
- 3) 地稿：横田家大工文書の研究(1)、研究紀要、第11号、PP.169、共栄学園短期大学、1995.3
- 4) 注5)文獻、PP.253
- 5) 地稿：多間型の民家について、大会学術講演要録集、PP.113、日本建築学会、1999.9
- 6) いわき市史編さん委員会：いわき市史、第10巻近代資料Ⅰ（上）、PP.430、いわき市、1993.3

（2000年6月10日原稿受理、2000年11月14日採用決定）